

情報が増えるにつれて湾岸戦争における日本配備のトマホークの役割に衝撃を受けた。

歴史上初めてトマホークが実戦使用されたのは、「砂漠の嵐」作戦が始まった一九九一年一月一七日であった。当時、横須賀には四隻のトマホーク発射能力艦が母港にされていた。そのうちの一隻は横須賀に母港を定めたばかりで湾岸派遣のタイミングにはなかった。それを例外とすると、三隻すべてが湾岸に派遣されトマホーク発射艦として使われた。しかも、先に述べたファイブとバンカーヒルの二隻は格別の任務を与えられた。

バンカーヒルはバグダッドへの第一撃の任務を負った。米海軍の公式記録は、「イージス巡洋艦サンジャントが紅海からイラクに向けて最初のトマホーク・ミサイルを発射した。瞬時においてペルシャ湾からバンカーヒルがそれに続いた。歴史的な瞬間であった」と書いている。また、最初の攻撃目標には、レダー基地、対空砲火基地、指揮管制基地などともにバグダッドのサダム・フセイン宮殿が含まれていた。

この一文を分析すると興味深い事実が浮かび上がる。まず当時の通常弾頭トマホークの標準射程距離一一〇〇キロメートル（現在は射程が伸びている）を考えると、紅海からバグダッドを狙うのは困難であり、フセイン宮殿攻撃はペルシャ湾のバンカーヒルが担ったと考えられる。また、亜音速で飛ぶ巡航ミサイルは一一〇〇キロメートルを飛ぶのに五分かかる。発射時刻は紅海の軍艦の方が早くても、着弾はペルシャ湾からのトマホークの方が早い。こう考えると、失敗を許されない「名譽ある」歴史上初のトマホークの標的・フセイン宮殿への攻撃を、横須賀のバンカーヒルが担ったと考えられるのである。

一方、駆逐艦ファイブは、湾岸戦争におけるトマホークの最多発射艦となった。文献によつて統計にわずかのばらつきがあるが、湾岸戦争では一八隻の軍艦から二八八発のトマホークが発射され、そのうちファイブが六〇発を発射した。米海軍の記録はファイブを最多発射艦として記録した。二番目の記録は四〇発である。バンカーヒル二八発、モービルベイ二二発を合わせると、横須賀母港の軍艦は合計一一〇発、全体の約四〇％の発射を担ったことになる。

この一例だけでも、前進配備された第7艦隊が、米軍の即戦攻撃力としていかに重要であるかを物語っている。

#### ペルシャ湾と第7艦隊

日本に前進配備された第7艦隊は、ペルシャ湾地域に戦力を提供する部隊でもある。図序1に説明したように、湾岸地域は米中央軍の責任区域に属する。中央軍にはバーレーンの首都マナマに司令部を置く中央海軍があり、そこに第5艦隊がいる。しかし、第5艦隊区域内に母港を置いている戦闘艦は一隻もない。太平洋・インド洋側の第7艦隊と大西洋・地中海側の第6艦隊からのローテーションで必要な戦力を維持しているのである。イスラム世界における根

在日米軍 (続)  
by 梅林宏道

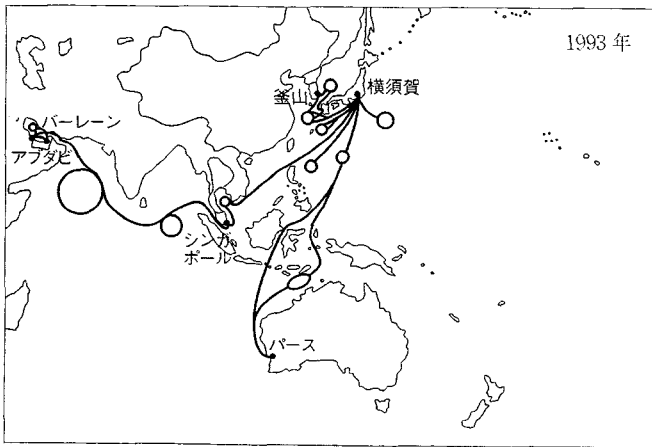
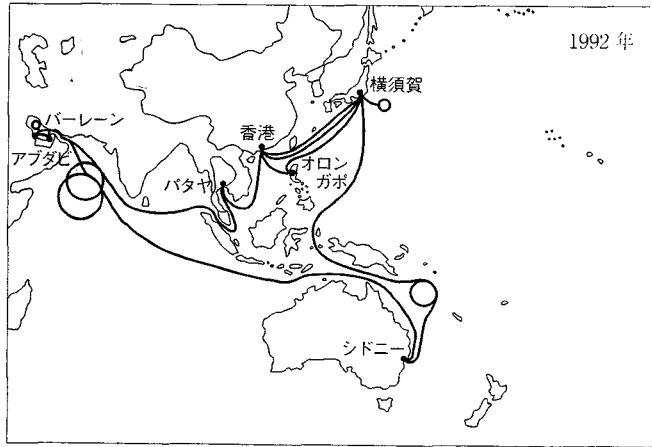


図3-1 空母インデペンデンスの航跡(1992-1993年)

強い反米感情が、目立った米軍の常駐を許さないからである。平均して約一万五〇〇〇人の海軍兵力が湾岸に展開している。

第7艦隊に前進配備されている日本母港の軍艦一七隻(掃海艦を除く)は、なかでも主要な戦力供給源である。

二〇〇一年九月一日の米本土テロ攻撃に端を発したアフガン攻撃(米国は「不朽の自由作戦」と呼ぶ)が一〇月七日に始まった。攻撃の主力は、九月二日時点ですでに第5海軍旗下でアラビア海に展開していた空母エンタープライズ戦隊であった。エンタープライズは大西洋艦隊所属で地中海から湾岸地域に入っていた。しかし、そのなかに横須賀母港の駆逐艦オブライエンが混じっていた。攻撃第一日にアフガンに発射された五〇発のトマホークの一部を、オブライエンが担った。このオブライエンは、湾岸戦争以来継続している多国籍軍によるイラク経済制裁のための船舶臨検活動にローテーションで参加する軍艦として、当時湾岸地域に展開していたのである。

横須賀を母港にする空母もまたこの地域に絶えず展開している姿を例示するために、空母インデペンデンスが横須賀を母港とした翌年からの二年間(一九九二、九三年)の航跡を例示しておく(図3-1)。この図は、米国の情報公開制度によって筆者自身が得た原資料から作成したものである。

〔一九九二年〕

一九九二年三月、空母インデペンデンスは、まずフィリピン海演習のために出航した。米軍撤退過程にあつたフィリピンのスービック基地に最後の訪問を果たして、横須賀に帰港した。四月、オーストラリア海軍との共同演習と珊瑚海海戦記念式典に参加するため出航し、その後、五月にオーストラリアから直接、湾岸地域へ。五月二日に第7艦隊から中央海軍第5艦隊に編入。九月一七日にホルムズ海峡を出るまで丸四か月、対イラク「砂漠の嵐」作戦の延長と「南方監視（サザン・ウォッチ）」作戦に参加。一〇月帰港したのち約四か月の長期オーバーホールに入った。

〔一九九三年〕

オーバーホール終了後、二月中旬から三月まで、米韓軍事演習「チームスピリット」に参加するため、東シナ海と日本海に展開。五月、春期訓練のため約二か月オーストラリア西海岸まで演習航海。帰路には海上自衛隊との共同演習。九月には、海上自衛隊との共同演習や、沖縄近海において沖縄海兵隊との統合演習を行った。十一月の半ば、ペルシャ湾岸地域へ「南方監視」作戦に従事するため出航。そしてペルシャ湾で越年をした。

空母の湾岸派遣は、空母だけではなく横須賀母港の随伴艦を複数同行して行われている。第7艦隊は、第5艦隊への兵力供給部隊として不可欠であることが分かるであろう。在日米軍とは、日本周辺に関心をもち、そこで活動している部隊などではないことが、ここにも明白に現れている。筆者が入手したインデペンデンスの母港化から四年間のデータから統計をとると、航海に出た時間の七割以上を、インデペンデンスは極東外の地域で任務に就いている。日米安保条約の極東条項を考えると、現実の安保体制は「三割安保」ということになる。

#### 母港受け入れ外交

米軍の世界展開のための空母の母港化を、日本政府がどのように受け入れたのかを見ておこう。米国立公文書館には、母港化交渉の当時の在日米大使館と国務省との間のやりとりを示す多くの極秘文書が公開されている。筆者はそれを丹念に調査したが、そこに浮かび上がってくるのは、思わずため息をつきたくするような没主体的な日本外交の姿であった。

前述したように、空母の日本への母港はニクソン・ドクトリンによる米軍の大再編のなかで行われた。しかし、米国内の厳しい財政事情を反映して米国防総省は混乱し、その再編方針は首尾一貫性のないものであった。日本外交がもう少ししっかりしていれば、空母の母港化はなく、第7艦隊の様相も大きく変わっていたであろう。